
闇色ドルチェ

夢水漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色ドルチェ

【Nコード】

N3354N

【作者名】

夢氷漣

【あらすじ】

私、龍王琥珀りゅうおうこはくと申します。実家の店であるケーキ屋と喫茶を兼ね備えている店、龍邸で働いています。そんな私には物凄い悩みが一つ、昔からあります。それは幼なじみのカマヤろ…お坊ちゃまの事です。 ※書き直し&いろんな所を大幅に変更する予定です。

琥珀の嘆き

私は龍王琥珀りゅうおうこはくと申します。

名字が珍しい所為で、あだ名はりゅうおう。

世界の半分をくとか言わないのか？とからかわれるのですが、からかう気が起きない位にしこたまアレしました。

私はまだまだ未熟な花も恥じらう女の子で、もっぱら家のお手伝いをして暇を潰：お小遣いを稼いでおります。

最近では家のケーキと喫茶店を兼ねた店を任されっ放しでそこにこもっていたりします。

そんな私、琥珀は：とても困っている事がありました。

何に困っているかと言うと、幼なじみに困っているのですよ。

：あのヤロー：私の片思いの相手を取りやがるんですよ！！

美人で器用。

美しい上に清楚で良いところの……お坊ちゃま。

そう！！

いつも人の彼氏、片思いの相手をぶんどる糞幼なじみはオカマなんです！！

わ・ざ・わ・ざ！！私の好きな相手に恋人に色目を使い魅了した挙げ句の果てにポイツと捨てているんです！！

まあ、それだけで靡く男は兎も角も、浮かれて恋する事を許されていないみたいで腹が立ちます。

滅茶苦茶腹が立ちます。

嫌い。嫌いなんです。

なのにあのヤロー……店に……来るんです……

店に来た以上、お客さまです。

お客さまは神さまに等しいのです。

金を持っている方は尚更、むしり取……丁寧に対応しなくてはなりません。

今日もむかつ腹を抑えて、毎回毎回毎回……私が出てくる時間にお客さまとして来やがります幼なじみを笑顔で「いらっしやいませー」と迎えてやります。

「んふふふ……あいつ変わらず地味な髪型ねえ？」

ほっとけ！！この○○○野郎！！

おっと……いけないいけない……私はじえんとる、とってもイイテンインサン。

ふー……お客さまでなければ殴っている所ですね。

このオカマさん……本当の女の子になりたいのでしょうね、きっと。ならば遠慮はいりません。

寧ろ無料でやらせて下さい。

奴と私

くそや…コホン。

そのオカマ、お坊っちゃまのお名前は“前園五郎左右衛門”。

まあその、ごろうさえもと読みます。

無駄に長い上に男前な名前ですね。

名前に反して昔から女の子思考でございまして、私の趣味を一々批判してきやがるのでございますよ。

例えば私にネクロフィリアの気があるともレズの気があるとも○野郎には関係な…あなた様には関係はないと思われますが。

それは兎も角、早速イイテンインサンぶりをお見せしなくてはですね。

「何をお召し上がりになられますか？五郎左右衛門お坊ちゃま。」

「そんな名前で呼ばないでちょうだい！！アタシの名前は“由梨”
！！由梨よ！！」

「…いつもどおり、ショートケーキとローズティーでございますね？
？畏まりました五郎左右衛門お坊ちゃま。」

「だから…アタシの名前は！！」

更に何か仰る気のようにですが、いくら人の少ないこのお店でも、性悪オカマと話す時間…いえ、コントをする時間はないのでございますよ。

フフフ。

金だけ落として帰って頂けるととても助かるのですがね…などと、思っておりませんよ？これっぽっちも。

イイテンインサンはそんな事思いませーん。

お父さんの愛が詰まった当店ご自慢のショートケーキを出しして、ローズティーも横に添える。

私は知ってますよ。ええ。

五郎左右衛門さまがローズティーが苦手でございます事を。フッフ。五郎左右衛門さまの永遠の片思いのお相手は、私のお父さんです。気持ち悪…いえいえ、とっても素敵なアイですね。けっ。

お父さんのお話をする時だけ熱っぽく大人しく、後は小煩い小蠅の様。

それが残念な男、五郎左右衛門さまです。

このローズティーは、その麗しきお父さんと…奴には残念だと言われましたが、私のお世話した薔薇を使用していたりします。

失礼な男ですね、五郎は。

それを私が淹れて仕上げるんですけど…最後に投入する花を千切る作業がとても嫌です。

このヤローがジッと見つめてきますから。

美しい黒色の髪と、色白の肌。
折れそうな腰に、泣き黒子。

誰かが奴の事を…五郎左右衛門さまの事を“気高き幻想の姫の様”
と曰いやがりましたが、これが幻想の姫君として出てきた日には王子は裸で逃げると思いうのです…私は。
オカマですしね、ええ。

「相変わらず下手ねえ…淹れるの。」

「そうですか。」

なら来るなよ!!レ○プし易いように手足を固定してふん縛って路地裏に転がしますよ!!

とと…自分じえんとる聖母の様なイイテンインサン。

…とりあえず早く帰っていただかないと、私の精神が持ちそうにありませんね。本当に。

「今度、アタシが淹れてあげようか？」

「いえ、結構でございます。とてもとても恐縮です。」

一緒に居たくありませんし。

「いいからいいから、来なさいよ。」

毎度の事ながらしつこい方ですね。

着物美人である五郎左右衛門さまは、私を連れ出してはナンパをして優越感に浸っているんですよ。

それ以外に私に関わる理由が分かりませんし。

わざわざ私を連れ出す意味など分かってはいますが、私は何も言いません。

言うもんですか。

今も私を小馬鹿にしているんだろう事が、「ついでに夕飯も作ってあげるわよ？毎日」等と曰っている事でよく分かりますね。

確かに私はかなり：いや、少々料理が苦手ですけど、一応男である五郎左右衛門さまに作って貰ったりなんかしたら、流石に私の矜持がポツキリ折れますよ。

それはまるでポツキーの如く。

「結構です。いつまでもおんぶに抱っこしてはいけませんから。今日は用事がありますし——」

あ、と思った時には既に遅く、オカマやろ：お坊ちゃまはニタリと笑いやがったのでございます。

美人だな糞っ！！

「彼氏？新しく、彼氏なんか作ったのね：琥珀のくせに：」

ああ、また、私の恋人をぶんどる気でございますねえ？フフフ。

……………そろそろ気力が尽きてしまいそう。

私と彼氏

「――なので、気を付けて下さいね。」

「オカマ：か。実際に見たことないなあ、僕。」

彼氏の名前はルシードさん。

綺麗な金髪とヒヤシンス色の瞳の美しい外人さん、超別嬪さんです。

外人さんと付き合ったのは初めてでございますが：とてもとても日本語のお上手な方なんです。

ルシードさんは私より40cmくらい高い180後半でございます：あのオカマ野郎も似たような身長です。

ルシードさんに見下ろされるとドキドキしますが：五郎左右衛門さまに見られると腸が煮えくり返りそうになります。

その苛々は、偶の休みをお取りになられるルシードさんで落としてます。

「男色の気は無いし：それに、可愛い琥珀よりその子が好きになるとは思えないなあ。」

クスクスと笑って、ですが、嫌みのない言葉を言いながら頭を撫でてくれるルシードさん。

彼奴とは物凄い違いですね、本当に。

「琥珀：その人の家に遊びに行ったりするの？」

「あ、はい。昔からの腐れ縁と申しますか…なんと申しますか…父が居ない時の保護者変わりと申しますか…」

「ふうん…」

…経験上、いつも同じ所で会うとバレル危険があると分かっていますので、いつもデートコースは変えています。

“アレ”の好かない場所、ゲームセンター等がデートコースの主でごえますのよ。

なので、なかなか偶然会う事もないと思われませんが……糞最悪。

「男は狼だからさ…どんなに大人しく見えても気を付けてね？」

真正面から近づいてくる魔性の女性(?)。

私の頭の中はパニックに陥っているようです。

「気を付けるのはルシードさんです。私なんかより全然美味しそうな美人さんなんですから、絶対に目を付けられた筈です。美味しそうですね。」

着物を着た和風美人が近寄ってきます。

逃げたら不自然過ぎます。

胃がムカムカしてきました。

凄く殴りたくなります。

ルシードさんは私を好いてくれているみたいですが…

残念な事に五郎左右衛門さまより全然女の子らしくも美人でもない私では、射止め続けるのは難しいのではないのでしょうか？

プライドが!!

飲み込める程のプライドが…!!

「あら。“偶然”ねえ?琥珀。」

知ってますよ五郎左右衛門さま。

あなた様はこの公園を嫌っていらっしやるという情報を。
舐め腐らないで下さいませ。

まあ、ですから、これは私の不手際ですねえ。
クソツタレメガ…

「ご機嫌麗しゅうございますねえ。こんな“偶然”もあるものなの
でございますねえ…ほんとおにい。家からわりと遠いのですがねえ
?」

遠回しに『遠い家からつけて来ないで頂けませんか?』と言ってみ
たものの、猫の皮をかぶった五郎左右衛門さまは

「これも一つの縁、と言いますか…琥珀、殿方、お隣に座っても宜
しいかしら?」

と、忌々しい事に…にこやかに聞いてきやがりました。

すると、ルシードさんは「宜しいですよ。それと、麗しいお嬢さん、
お名前を聞いても?」と英国紳士そのもので勧めてしまいました。

狭量では?と思われてしまいそうですが——また、取られてしま
うのは嫌なのです。

ルシードさんは、きっと、私より美人であらせられます五郎左右衛

門さまにい…

ああああああ！！

考えただけでも嫌ですううう！！！！

「前園由梨ですわ。あなた様は？」

「ルシード・R・ラミエルです。ルシード、とお呼び下さい。」

仲良くお話してます、ね、気の所為？

「ルシードさんって、素敵な男性ですわね。琥珀が好きになる筈ですわ…」

「お世辞でも嬉しい事を言ってくれるね。」

……………顔を赤くしないでよ。

「琥珀とルシードさん。もし宜しければアタシの家に」

……………。

「折角のお誘い申し訳ありませんが、私、体調が優れないみたいで
すので家に帰らせていただきます。ご機嫌よう…」

思わず条件反射で逃げてしまいました。

“また”

“彼女”はとても美人なので、あれだけでいつも取られてしまう。

…分かってますよ。

私が“彼女”よりも、見た目も性格も可愛くはないくらい。
家事も…下手だし…

料理上手なお母さんに似てないし…

なにより長年彼女絡みでふられたせいかな、狭量になっていつている
気が…いや、狭量になってる。

…最悪です、私。

双子と私

私、琥珀は……悲しくなったらよく行く所があります。

それは——お墓。

私のお母さんのお墓と、あの人のお墓があるお寺へ行きます。

あの人は…双子でした。

弟さんはそれはそれは優しい方で、名前は由梨。

五郎左右衛門さまが使ってる名前は、弟さんのお名前です。

お二方はとても仲のよいご兄弟で——でも、由梨さんは癌で…

確か、兄である五郎左右衛門さまが代々続く歌舞伎の女形をやっているのですが、弟である由梨さんは…ただのオマケとして扱われていました。

そして五郎左右衛門さまがその扱いの差をととても気にしていました。

その大事な片割れである由梨さんが癌で亡くなった時、あの五郎左右衛門さまが三日三晩も飲まず食わず寝ずに過ごしたとか。

それが——嫌いにはなれないたった一つの理由、かもしれません。まあ、それ以外はクソツタレなオカマですからね。

「ああ、やっぱり此処に居たのね？この馬鹿娘は！！」

軽い香水の匂いを漂わせた五郎左右衛門さまが、私を見てフンと嘲笑いやがりました。

実は其処まで悪くない奴ではないんじゃないかと思ったりしても、やはり腹が立ちますね。

「ほら、おチビさん風邪引くわよ。」

「お、おチビさんではありませんよっ!! あなた様がデカすぎるだけでごぜえますよ!!」

「その喋り方は腹が立つわ、止めなさいよ!!」

「ポリシーを止めると仰るのですかあ!？」

はあ、と溜め息を吐かれて、私は体をびくりとさせました。

呆れられるのは…嫌です。
…嫌です。

「ほら…今の季節は寒いんだから、此処にずっと居ちゃ駄目よ。それくらい分かるでしょ? あなたでも。」

腹が立ちますが、五郎左右衛門さまが言った通りで…もう夕方の寒い時間。

今の季節は秋だから、尚のこと寒さが身に沁みる。

だから、今更すごく寒い格好をしていると自覚してしまい、更に今

更ですがね…寒くなってきてしまいましたよ。

「大体ね…あんたは昔っから思ったらそれだけってなるから駄目なのよ。」

「うう…」

言葉ありませんねえ。

確かに思ったら一直線ですから、完璧主義者な五郎左右衛門さまには…かなり滑稽に見えている事でしょねえ。

かなり恥ずかしいです。

「はあ…」

また溜め息を吐かれてしまいました。

溜め息は…苦手です…

「あ、ごめんなさいね？でも、あなたがこんな時間まで此処に突っ立っているのが悪いのよ？由梨も、さぞかしい迷惑って思っているでしょうね。」

「由梨さんはそんな方ではござえません!!」

そう叫ぶと「あら…」と言ったきり、五郎左右衛門さまは黙り込みました。

そして唐突に私の手を握り締めて、意地悪な笑みを浮かべて仰いました。

「ほら、良いから帰るわよ？お馬鹿さん。」

…何故、満面の笑みなのでしょうか？

何か企んでいるのでしょうか？

ちょっと…いや、かなり…かなり…怖いのですが…

私と手料理

「由梨さんじゃなくて、五郎左右衛門さんか。」

五郎左右衛門さまが来ないみたいなので、ルシードさんに私のお父さんのお店：龍邸に来てもらいました。

「由梨さんは弟さんの名前なんです。五郎左右衛門さまは由梨さんの名前を可愛い狡いと仰って、由梨さんは五郎左右衛門さまが父さまに認められてて狡いと仰ってましたね：懐かしい。」

「ふうん…」

ルシードさんは、何やら面白くない様です。

しきりに店の中を眺めては、顔を顰めています。

「それより…」

店、琥珀ひとりなの？」

「あ、はい：お父さんは大抵寝込んでいますから。」

そう、お父さんは体が弱いのです。

精神的にもきてしまっていて、とてもお店を経営出来る状態ではないです。

で、なければ：中学生である私が此処までお手伝いをする訳がないです。

「遊びたい盛りだろうに、大変なんだね」

「まあ、お母さんを早くに亡くしてお父さんも大変落ち込まれた様子ですし…ルシードさんに会えば、それだけで楽しいからよいですよ。」

「…随分と、他人行儀な話し方をするよね…琥珀は。」

「……そう、教え込まれましたので。」

へらへらと笑ってそう言えば、ルシードさんが黙ってしまいました。

五郎左右衛門さまといい、ルシードさんといい…話し方を気にし過ぎだと思うのですが…

「ちょっと、寂しいな。」

そう言っただけで笑ったルシードさんを、好きになって本当に良かったと思いました。

やはり、今まで同年代の遊びたい盛りの子達と付き合い合っていたからでしょうか…

私にはどうにも同年代の子達とは合わないようで、まったく付き合いは出来なかったのです。

そう、ただでさえそうでしたのに……

由梨さんがお亡くなりになってから、五郎左右衛門さまがやたらと邪魔をなさるようになりました。

あの可愛らしい顔に高く甘い声。

動きもしなやかで花の様。

ルシードさんとは違う、とても女性的な美貌です。

流石は女形をなさる方です。

明け透けにいうと流石オカマ…女らしさを追求した不自然なくらいの女らしいですね。
ケツ。

「ねえ琥珀。」

意識を遠くに飛ばしていた私に、ルシードさんは遠慮がちに話しかけて下さいました。

…ぼけっとしていた顔を見られて、少々お恥ずかしいです。

「なんでございましょうか？」

首を傾げて見つめると、ルシードさんは苦笑しました。

…至らない所でもあったのでしょうか？

言ってくれるなら駄目な所は何でも直しますよ？

「ちゃんとご飯食べてる？」

ああ、その様な事をご心配してくださっていたんですね!!

嬉しくなってしまうして、はしたない事にルシードさんの手を掴み、力強く答えました。

「よく五郎左右衛門さまにお夕餉を頂いておりますので、大丈夫でございますよ!!」

…何故カルシードさんが、「将来の為にもご飯くらい作れるようになるうね?」と、私に教えてくださる事となりましたよ。

私的にも作れるようにならねばと思ってましたが…

お父さんはデザート系とお粥しか作れない人なので、その様なものを教えてくれる方が五郎左右衛門さましかいないと、若干諦めておりました。

「ですが…8歳も年上の方とはいえ、男性に教えて貰うのは矢張り抵抗が…」

そう心の言葉を漏らしてしまいました所、大変真面目なお顔で仰いました。

「そうほいほいと男性の家に行く方が、女性として駄目だと思うよ?」

「で、ですが…五郎左右衛門さまはオカマさんなので…」

「でも、五郎左右衛門さんも一応は男性でしょ? 駄目だと思う。いや、駄目だ。絶対駄目。」

とてつもなく駄目だしをされてしまいました。

……ルシードさんの仰る通り、なんだかんだとご迷惑をお掛けするのも失礼ですよね。

とりあえず、日曜日に料理を習う事となりました。

どうにかして五郎左右衛門さまにバレないようにしませんが……です。

…失敗作を見られたら、やはり恥ずかしいですし。

私のお弁当

「最近遅くまで何やっているのよ。」

11時の開店と共に、五郎左右衛門さまがそう曰いました。

ふっふっふっふっ…今日の琥珀は一味違うのでございますよ。

今に見てやがりなさい五郎左右衛門さま!!

席に着いた五郎左右衛門さまに、今日は珈琲を淹れて差し上げました。

「あら…アタシまだ注文してないわヨ？」

「サービスでございますのよ。ほほほ。」

「あ、あら…ありがとう、裏がありそうでも気持ち悪いけど嬉しいわ。」

そう言いながら、優雅に珈琲をお飲みになります五郎左右衛門さまは、まるで絵を見ているかのような気分になる程…今日もお美しくありますね。

それが腹立たしいことこの上ございませんが。

「一言余計ですよ…五郎左右衛門お坊ちゃま。」

由梨さんなら、誉めて頭を撫でて下さるのに…

いえいえ、人を比べるなど最低ですよ琥珀。

幾らこのカマ野ろ、幼なじみ相手だとしても親しき仲にも礼儀は持たなければ。

軽く自己嫌悪をしながらもギャフンと言わせたくて作った“とあるもの”を…五郎左右衛門さまの目の前にドンと置きました。

まあ、別に何時ものお礼だとか目には目を食には食をとっているだけです。

別に愛情なんかこれつつつつぽっちも入れてません。

と、内で言い訳しつつ…さあ、御賞味しやがれです五郎左右衛門さま！！

「おべん…と…？」

「はい、精一杯作らせていただきました。この龍王琥珀が！！」

「…あ…あんたの手作り、なの！？」

失礼な事に、口をあんぐりと開ける五郎左右衛門さま。

そこまで驚愕されると、流石に私の女心が傷つくというものでございますよ…五郎左右衛門さま。

「こ…これ、どうしたのよ？あんた料理苦手だったんじゃ…」

胡散臭そうに私を見つめてきます五郎左右衛門さまは、「もしや…」

と何かに感づいたご様子です。

駄目ですよ琥珀。

バレたらきつと、邪魔をしに来てしまいますし、女としてのプライドを粉々に碎かれてしまうに違いありません。

「え…と…ですね…」

ジッとしてくる五郎左右衛門さまを見据え、半分とはいえ嘘を吐くような真似をするのだと思うと悲しくなってきました。

いくらルシードさんを取られたくないとはいえ…です。

「いつもお料理を振る舞って下さる五郎左右衛門さまの為に…私、1人で頑張ってみたのです…」

そう私が言いますと、五郎左右衛門さまは俯いてしまわれました。

…いくらムカつくカマ…悪戯が過ぎます五郎左右衛門さまでも、嫌われるのは…矢張り嫌なんです。

嘘を吐いたとバレて嫌われるのは特に…ね。

とりあえず、駄目出しをしておきます。

「迷惑でしたか？」

人様とお話する時は顔を見てしなさいと、昔に五郎左右衛門さまが仰いました。

なので、失礼ながら俯いてしまった五郎左右衛門さまの顔を、下から覗き見ながらそう言わせていただきましたよ。

「べ、別にそんな事言っていないじゃない!!」

アタシが作ったのより美味しいとは思えないけど、食べてあげるから感謝なさい!!」

「けど、不味かったらただじゃおかないわよ」

「なにゆえ五郎左右衛門さまのお顔が赤いのでございましょうかね？」

突発的なお病気ではありません……よね？」

それに……ただじゃおかないとの言葉が怖いのですが……

不味かったら何をされてしまうのでしょうか？」

「まあ……不味かったら料理くらい教えてあげても……良いわよ……」

「何か仰いましたか？」

丁度グラスを拭いている最中だった上に小さい声だったので、五郎左右衛門さまの呟きは聞き取れませんでした。

「別になんでもないわよ。とりあえず、クッキーを寄越しなさい……クッキーを」

「珍しいですね。五郎左右衛門さまがショートケーキ以外をお召し上がりになられるなんて……」

「まあね。たまには食べたくなるのよ。」

バタークッキーを取り出して、お皿に盛り付けてお渡しすると、それはそれは美味しそうに召し上がりました。

口の端に少々食べ残しを付けるなんて、とてもやんちゃな人だった由梨さんを思い出します。

…しみりとした気分になりました。

「美味しいですか？ 由梨さん」

「……え？」

考えていた所為か間違えました。
名前を間違えて呼んだらとてもびっくりしたような顔をしました。

「あ、ごめんなさいませ!! つい…」

…先生をお母さんと間違えた時並みに恥ずかしいですし、よりによって間違えた名前が名前です。

その所為で五郎左右衛門さまは憤慨なさったのか、何も言わずにクッキーはいつものように召し上がりました。

そう、いつものようにご丁寧に。

いえ、まあ、たまには乱暴に召し上がりたいていのでございませよ。

お家では寛ぐ事が出来ないようですから。

…そういう事に致しましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3354n/>

闇色ドルチェ

2011年11月17日20時06分発行